

平成紙



おりおりの記

## ガリヴァー旅行記と長寿日本

政策研究大学院大学理事・客員教授  
日本経済研究センター参与

小島 明

「古典は人々に胆力を与える」と、哲学者でダ  
ンテ研究の政界的な権威、故今道友信さんは古典  
を読むことの大切さを強調し、さらに次のように  
言っていた。

「古典（クラシックス）は軍艦を意味するラテ  
ン語のクラシカスに通じる。国の危機に軍艦を寄  
付できる人をそう呼ぶようになり、後に人間の精  
神の危機を乗り越えるときの決断力、底力を与え  
てくれる作品を指すようになった」

そんな今道さんの勧めもあって、最近、古典と  
言われるものを読み返している。すると『ガリヴ  
ァー旅行記』が子供用のおとぎ話ではなく、大人  
向けの政治学、社会学入門書であることに気付い  
た。

例えば、第3篇に出てくる「不死人間」の話。  
ガリヴァーは命が永遠なら世界一のカネ持ちにな  
り、世界一の知恵者ともなって社会の尊敬を集め  
ると夢想し、期待を膨らませて「不死人間」に会  
いにいった。ところが結果はひどく失望でしかな  
かった。

「不死人間」たちは「不死」ではあるが「不老」  
ではない。500歳になっても700歳になっても生き  
てはいるが老醜がどんどんひどくなる。視力も記  
憶力も衰え、若い世代とは言葉も全く通じなくな  
り、自閉症に陥る。そんな彼らが最も嫉妬心にか  
られるのは普通の人間の「葬式」を見るときだ  
という。パンチ力のある風刺である。

著者のジョナ  
サン・スウィフ  
トはアイルラン  
ド人。初版は  
1726年。「不死  
人間」に続く章  
では鎖国時代の  
日本が、西洋文  
学において初め  
て登場する。そ

の日本はいま、世界最長寿国となり「人生100年  
時代」にどう向き合ったらいいかと大騒ぎし、政  
府は「人生100年時代構想会議」を立ち上げた。  
100年人生を論じた『ライフシフト』の著者、リ  
ンダ・グラットン氏も会議メンバーに加わってい  
る。

スウィフトが彼一流の風刺を交えて示唆したの  
は人生の長さより、その中身が重要だということ  
だろう。日本は「延命医療」ばかりが目目され、  
いわゆる死生観をめぐるまともな議論は少ない。  
健康寿命と平均寿命の差が10年程もある。最後の  
10年間で寝たきりになる人も多い。終末期医療に  
かかるコストは減少する一方の若い世代に押し付  
けられる。

私事になるが、いろいろ考えて数年前、妻と一  
緒に「尊厳死協会」にはいり、延命医療を辞退す  
ることにした。

